平成 30(2018)年度

サイエンス・アソシエーション・プロジェクト

須坂高校スリランカ研修(2019 年 1 月 13 日～20 日)

１．はじめに

本年度(平成 30 年度)、須坂高校は初めてサイエンス・アソシエーション・プロジェクトに応募し、平成 31 年 1 月 13 日～20 日の 7 泊(1 機中泊) 8 日、スリランカ共和国での研修を行った。

プロジェクト参加に至る背景は以下の通りである。

＜背景＞

須坂高校は、生徒の自主性を重んじながら将来有望な若者の育成に努め、各界・各分野で活躍する人材を輩出してきている。しかし、グローバル化が叫ばれる近年においては、研修の場は国内に止まらず、その視線は海外にまで向けなければならない状況である。昨年度、学校として初のマルタ共和国での語学研修を実施し、教職員・生徒・保護者を含めてその必要性を実感している。

そこで、理系分野を中心としながらも幅広く総合的に物事を捉え、グローバルな視野を持った生徒を育てるために、スザカデミア（スザカ＋アカデミア）プロジェクトを創設し、生徒に様々な刺激を与えるアカデミックな教育の推進を図りたいと考えた。このプロジェクトでは、各分野で活躍する卒業生はもちろん、国内に限らず海外でも活躍している方々による講義や、探求的な学びを保証するための企画を提供していく。

スリランカは、30年近く続いた内戦集結後、観光などを中心とした内需拡大を図っており、その成長率は年５％前後で推移している。90％を超える識字率があり教育力には定評がある上、英語が公用語の１つであること。また世界遺産など自然環境にも恵まれ、研修を行う地として適していると考えた。

これを元に、9 月から生徒募集を開始し、最終的に 10 月末には 2 年生 6 名、1 年生 4 名の計 10 名が選ばれた。募集にあたっては、生徒一人一人が研究テーマを持って参加することと異文化と他国の様々な人々との交流に高い興味関心があることを条件とした。それぞれの生徒の研究課題は以下の通りである。

- アーユルヴェーダと西洋医学・漢方との共通点と相違点
- スリランカの環境問題について、ゴミと衛生状態について
- スリランカの医療と教育
- スリランカの立場から考える日本の過剰消費
- アーユルヴェーダがどのように人々の生活に浸透しているか
- スリランカの教育事情(進学率、教育水準と生活水準)
- バワ建築の特徴と日本建築との比較
- アーユルヴェーダと現代医学の共通点と相違点
- 民族衣装における日本とスリランカの共通点と相違点
- 人々の宗教の捉え方と社会への影響、女性の社会的認知のされ方

以上の研究課題を元に、現地での活動として、現地機関で働く日本人の方々からの講演、アーユルヴェーダ体験、バワ建築による建物の見学、現地教育機関(学校)の訪問と交流、地元大学の日本語学科で学ぶ学生との交流、象の孤児院見学、世界文化遺産見学を行う研修計画を策定した。

実際の日程は以下の通りである。

●行程表

月日	時間	スケジュール	ホテル
1/13 Sun	15:20	長野発 →(はくたか)→ 東京駅 →(THE アクセス成田)→ホテル	マロウドインターナショナル成田
1/14 Mon	11:20 17:50 19:00	成田空港発 UL455 バンダラナイケ国際空港着 (専用車) ホテルへ JETRO (井上元太氏のレクチャー)	[コロンボ] フェアウェイコロンボ
1/15 Tue	AM PM	ジャヤワルダナセンター見学 バワ建築の建物見学 サバラガムワ大学生と交流・市内散策	[コロンボ] フェアウェイコロンボ
1/16 Wed	AM PM	JICA スリランカオフィス訪問 IOM(国際移住期間)スリランカオフィス訪問 ハイランドカレッジにて現地学生と交流	[ダンブッラ] ジェットウィングレイク
1/17 Thu	AM PM	世界遺産シギリヤロック見学 世界遺産ダンブッラ石窟寺院見学 ミンネリヤ国立公園サファリ体験	[ダンブッラ] ジェットウィングレイク
1/18 Fri	AM PM	世界遺産仏歯寺見学 お茶工場見学 ピンナラワ「象の孤児院」にて実地研修 ホテル到着後、アーユルヴェーダについて医師によるレクチャー	[ネゴンボ] ジェットウィングアーユルヴェーダパビリオン
1/19 Sat	AM PM 19:50	アーユルヴェーダ体験 ヨーガ～医師による診察～治療～食事 バワ建築によるホテル(ジェットウィングラグーン)見学～空港へ バンダラナイケ国際空港発 UL454	[機中泊]
1/20 Sun	07:30 12:07	成田空港着 長野着	

２．研修内容

以下、生徒の感想を中心にしながら、それぞれの研修内容についてまとめておく。

(1)現地で働く日本人の方々のお話

今回は、現地で働く日本人の方々のお話を聞く機会が３回あった。JETRO(日本貿易振興機構)の井上 元太さん、JICA(国際協力機構)スリランカオフィスの金地 晃史さん、宮坂　綾、日達　理奈さんの３人、そして、IOM(国際移住機関) 上田 雅子さんが、それぞれの立場から現在の仕事の内容、各機構・機関がもつ役割、そして日本を飛び出して海外で働くことについてレクチャーをしていただいた。

＜生徒の感想から＞

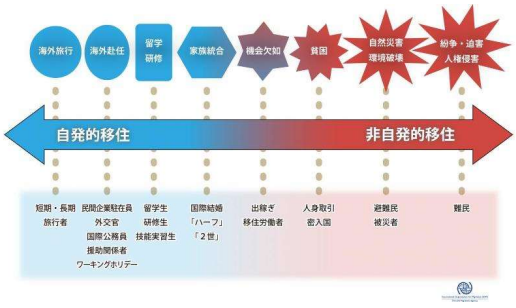
・<u>JETRO(日本貿易振興機構)井上 元太氏のレクチャー</u>

『JETRO という会社は日本と世界の結節点であり、橋渡しのような役割を果たしているということ。また、スリランカと日本の関係は昔から強く有り、観光業に関しては右肩上がりで、スリランカの経済を支えていることを学びました。私が知っていることはほんの一部であり、世界は広いと改めて感じました。また井上さんは、海外で働く心構えとして、食や言葉などの違いを楽しめることが大切だとおっしゃっていました。違いを拒絶するのではなく受け止めることは、外国に行ったときだけでなく、学校などの日々の暮らしでも大切ではないかと考えさせられました。』

・<u>JICA(国際協力機構)スリランカオフィスにて</u>

青年海外協力隊員としてスリランカに来ている三人の隊員の方から話を聞いた。参加しよう思った理由はほんとに些細なことがきっかけで、やろうと思えば人は行動に移せるものなのかと驚いたと同時に、自分は持ってはいない行動力にうらやましい、私もやってみたいなと思った。みなさんはスリランカのごみ事情をよくするために活動している。今のスリランカの状態を聞いたときは驚いた。日本では分別が当たり前だがスリランカには分別という考えが強くない。また回収率も低く、ゴミに対する意識が国全体を通して低い。環境と人の意識の違いでこんなにも違いがあるのだと知った。それでも何とかしてゴミに対する意識を変えようと活動している。一番驚いたのは土にかえるゴミでコンポストを作れること。コンポストを作ればゴミが少しでも再利用でき、環境の改善にも繋がるのでとても良いアイデアだと思った。でも、資源ゴミも分別するようにして、分別を二つから三つに増やそうと思っているがなかなか浸透しない。資源ゴミの分別も出来るようになって、リサイクルの幅が増えたら良いと思う。隊員の方がしていることはスリランカのためになることだから、もっと知ってもらって、みんなが協力してやろうとしていることが全部達成できたらいいと思った。

・<u>IOM(国際移住機関)スリランカオフィスにて</u>



IOM は世界的な人の移動の問題を専門に扱う唯一の国連機関。労働で移住をしたい人や自然災害、紛争などで自国に住めなくなってしまった人の移動、移住の手伝いなどをしている。でも、技術支援もしているというのは驚いた。移住先の国で生活が出来るようにカウンセリングをして、どうやって働くのかを決める。また、国に対しては出入国・国境管理能力の強化などもしている。ただ単に人の移動を支援しているだけでなく移動に関わるすべてのことを管理し、支援している。IOM は人が安心して移動できるために活動していて、それに関わることは手伝っているということが分かり、とてもすごい組織なのだと実感した。

スリランカ事務所にはスリランカ人だけではなく様々な国の人が働いていて、上田さんが職員の方と英語で話しているのを見ていると海外で、しかも国連機関で働いていてとてもかっこいいと思った。職員の方たちは私たちを笑顔で優しく迎えてくださり、海外ということに緊張をしていたが、緊張していたことも忘れるくらい楽しく、充実した時間だった。

(2)現地大学生・高校生との交流

今回の研修の中で、もう一つ大きなテーマは現地の大学生や高校生と交流することであった。今回は、サバラガムワ大学日本語学科学生と、そして小中高一貫校であるハイランド・カレッジの生徒たちとの交流を行った。

サバラガムワ大学は、スリランカ中央部サバラガムワ州にあり、コロンボにあるケラニア大学とともに日本語学科を持つ大学である。コロンボまでは車で 5 時間もかかるにもかかわらず、先生と学生合わせて８人がわざわざ我々との交流のために来てくれた。本校の生徒２人と大学生１人がグループになって現地の乗り物であるスリーウィーラー(トゥクトゥク)に乗り込み、市内を散策し、市場で買い物などをした。大学生は全員が日本への留学経験があり、流暢な日本語で生徒たちと様々な話しをしながら、午後の半日を過ごした。

ハイランド・カレッジには、３日目の午後に訪問した。校門を入ると、生徒たちが我々の足下にひざまずき挨拶をしてくれた。生徒によるマーチングバンドンに続いて校内に案内され歓迎セレモニー、それからバディになってくれた生徒たちと一緒にスリランカの流儀で食事を手で食べ、その後教室で交流を行った。

・<u>サバラガムワ大学生との交流</u>

サバラガムワ大学日本語学科の大学生との交流では、トゥクトゥクに乗ってコロンボの街を散策しました。トゥクトゥクは風を感じられてとても総会でした。市場では初めてココナッツにストローをさしたジュースを飲みました。ほんのり甘くてとてもおいしかったです。大学生との会話では、スリランカの伝統的な女性の民族衣装『サリー』のことを学ぶことができました。サリーにはキャンディアン・スタイルとインディアン・スタイルの２種類があり、シンハラ人、タミル人、宗派などによって着方が異なるそうです。また男性は『サロン』という腰巻きのような民族衣装があることを教えてもらいました。

大学生の人たちはみんな勉強熱心で、アルバイトのようなことは一切しないで日本語の勉強に打ち込んでいるそうで、本当に日本語が上手で感心しました。

私たちの相手をしてくれたサドニさんは、コロンボに来たのは初めてで、とても暑いと言っていました。何でも彼女の地元はとても涼しくて、高くても 25℃までしか行かないそう。スリランカはどこでもコロンボぐらい暑いと思っていたから、涼しいところがあることにとても驚きました。サドニさんは大学で日本の道徳教育についての論文を書くそうで、道徳についてたくさん話をしました。日本は小学校でしかやらないが、スリランカでは中学校、高校で勉強するとのこと。また、学校ではどんなことを習うのか、学校で習わないことはどこで習うのかなど、たくさん質問をしてくれました。日本の教科書をダウンロードして、勉強しているそうだが、私と話した内容が少しでも役に立っていたら嬉しいと思いました。私はサリーのことだけでなく、スリランカのことについてたくさん教えてもらいました。市場みたいなところで赤ちゃんの写真が売られている訳を質問すると、スリランカでは赤ちゃんができると、赤ちゃんの写真を買って、家に飾って置くそうだ。理由はサドニさんも分からないとか。でも、不思議な習慣におもしろいと思った。

・<u>ハイランド・カレッジ</u>

学校に着いてすぐにマーチングバンドがお出迎えをしてくれてすごくびっくりした。セレモニーでは仏教伝来の場面を表現する伝統的なダンスを踊ってくれた。衣装がとても華やかでとてもきれいだった。仏教が日本と違うから、日本では知ることが出来ない仏教の文化を知ることが出来たと思う。動きも独特でもう一回見てみたい。お昼にはカレーを一緒に食べた。初めて手で食べたが、とても難しかった。タイ米は日本のお米と違ってパラパラしているので、とても食べにくかった。スリランカのカレーは本当に辛いと聞いていたけど、自分が想像していたより何倍も辛かった。一つの

お弁当に何種類かのカレーが入っていて、それらをご飯と混ぜながら食べる。これだけいろいろな種類のカレーがあれば、毎日三食カレーでも飽きないと思った。実際、一緒に食べた学生は三食カレーで毎回カレーの種類が違うらしく、お昼に食べたカレーは全く辛くないと言っていた。慣れは恐ろしいと少し思った。須坂高校が訪問した記念に植樹をした。同世代の子とお互いにスポーツの話をしたり、サリーや浴衣のことを話したりすることが出来てとっても楽しかった。この交流をしてみてもっといろいろな国の人とたくさん話をしてみたいし、自分からたくさん話せるように英語がうまくなりたいと思った。

(3)世界遺産見学

スリランカとはスリ(光り輝く、聖なる)ランカ(島)という意味だ。その言葉の通り、北海道よりやや小さい国土に８つの世界遺産が点在している。紀元前３世紀にアーショカ王の王子マヒンダが仏教を伝えたと言われ、貴重な仏教遺跡も多い。

今回は、そのうちの３カ所を訪れた。

・<u>シギリヤロック</u>

５世紀に父王を殺した王子が岩山の頂に宮殿を築いた場所で、現在は遺跡のみだが、途中の岩肌にはシギリヤレディと呼ばれる女性を描いた壁画があり、頂上の王宮跡からは辺り一帯を見渡すことができ絶景を楽しむことができる。

・<u>ダンブッラ石窟寺院</u>

スリランカにおいて、最も保存状態がよい石窟寺院として知られている。黄金寺院の周辺には、確認されているだけで 80 以上の洞窟がある。黄金寺院において重要な寺院は５つであり、そのそれぞれに聖像や絵画がある。これらの聖像や絵画は、釈迦とその生涯に関連したものである。153 の釈迦像、３つのスリランカ王の像、４つのヒンドゥー教の神像が祀られている。絵画には、釈迦が最初に説教を行ったマーラへの説教も含まれている。

・<u>佛歯寺</u>

ダラダー・マーリガーワ寺院または佛歯寺は、仏教聖地であるスリランカのキャンディ に位置する寺。釈迦の犬歯が納められているとされる。スリランカの仏教徒にとって最も大切な場所であり、何度も足を運ぶ場所だという。スリランカで寺院に行くときは白い服を着るのが習慣で、真っ白い服を着た人々が礼拝に訪れていた。中に入ると佛歯が納められているという仏壇の前に花を手向ける祭壇があり、その前で多くの人々がお祈りをしている。中には一日中そこで祈りを捧げる人もいるそうだ。

(4)ミンネリヤ国立公園・ピンナラワ象の孤児院見学

・ミンネリヤ国立公園

ミンネリヤ国立公園は、1938年に野生動物保護区に指定され、1997年に国立公園に昇格した場所で、スリランカ象が多く集まる場所として有名である。公園内には３世紀マハセン王によって作られた巨大なミンネリヤ貯水池があり、この水源と野生動物が保護されている。象以外にも、水牛などの野生動物・野鳥を観察できる。

・ピンナラワ象の孤児院

親を亡くしたり、はぐれてしまった子象を保護している施設で、80頭ほどがいる。生育した象はその後寺院や象使いの元へと引き取られていく仕組みになっている。目の前で実際に見る象は思いの外大きかったが、飼育係の方の許可をいただき、実際に餌やりを体験することができた。間近で象に触れることができる幸運に恵まれた。

(5)アーユルヴェーダ体験

アーユルヴェーダはユナニ(ギリシャ・アラビア)医学、中国医学と並ぶ世界三大伝統医学の一つと言われる。毎日の食生活や運動などから病気を予防していく医療で、アーユルヴェーダの医師になるためには西洋医学同様に大学の医学部で６年間学ばなければならない。アーユルヴェーダでは、人はトリ・ドーシャと呼ばれる3つの要素（体液、病素）のバランスが崩れると病気になると考えられている。今回体験をしたのは、ジェットウィングアーユルヴェーダパビリオンというホテルで、滞在しながら治療を行うところだった。通常なら最低でも１週間から10日かけてゆっくりと治療を行うところを、特別に１泊２日の日程で体験をさせてもらった。

・アーユルヴェーダ

世界三大伝統医療の一つである『アーユルヴェーダ』を実際に体験しました。アーユルヴェーダとは神様からもらったもので有り、『脈、精神、健康状態』を診ることで病気を治し、健康を保つアドバイスをもらいます。薬にはハーブが使用されています。人間は『トリ・ドーシャ』と呼ばれる３つの要素を生まれたときから持っているそうで、10種類ある特性のどれかには必ず当てはまるのだそうです。私はKP(カパ・ピッタ)の体質だそうです。最初に医師が私の額に手を置き、同時に脈を診ます。これだけで、私の体質をぴたりと言い当てたのには本当に感動しました。その後、私の体質に合わせて調合したオイルを使ったマッサージを受け、２時間ほどなにもしないで静かに過ごしました。普段の生活とはまったく違うリズムで時間を過ごすことで、本当にリラックスしリフレッシュした気持ちになりました。

(6)バワ建築

ジェフリー・マニング・バワは、スリランカ・コロンボ出身のスリランカを代表する建築家で、トロピカル・モダニズムの第一人者である。その建築は、自然や風土、カルチャーをできるだけ空間に取り入れ、屋内と屋外がどこか繋がっているような独特な開放感があり、どこか和のテイストともとれるシンプルで直線的なデザインや借景、光と影の利用が特徴的で、なんとも言えない癒しの空間を実現している。水平線とプールの水面が溶け合うインフィニティプールもバワの発想によるものとされる。今回訪れたのは、バワの自宅だった『No. 11』、ザ・ギャラリーカフェ、ジェットウィングレイクホテル、シーママラカヤ寺院、そしてバワの弟子の設計であるジェットウィングレイクホテルには宿泊もすることができた。

・バワ建築

私の探究課題は『バワ建築』だった。バワ建築を実際に自分自身の目で見て感じたことは、自然を最大限に生かしていると言うことです。大きなガラス窓や家の至る所にある小さな吹き抜けから差し込む太陽の光、部屋と部屋を絶妙につなげて風通しをよくしたデザイン、ベランダに大きな木を植えることで日陰をつくったり、家の中に池があったり、本当に自然との融合を肌で感じることのできる建物でした。

また、宿泊したジェットウィングレイクホテルはバワの弟子によるものだったが、自然と一体化したかのようなレストラン部分、そこで出される野菜は自家栽培であり、ソーラーパネルの発電によって電気の供給をしたり、再利用するためにミネラルウォーターやボディーソープなどがガラス瓶に入れられるなど、あちこちに工夫がされていました。いつかこんな建物を手がけることができる建築家になりたいと思いました。

３．終わりに

スリランカはその名(光輝く島)の通りの美しい島国だった。首都はスリ・ジャヤワルダナ・プラ・コッテという長い名前だが、それは第 2 代大統領のジャヤワルダナ氏の名を冠したものだ。ジャヤワルダナ氏は親日家としても知られている。1951 年のサンフランシスコ講和会議にセイロン代表として出席した際、演説で「日本の掲げた理想に、独立を望むアジアの人々が共感を覚えたことを忘れないで欲しい」と述べ、また「憎悪は憎悪によって止むことはなく、慈愛によって止む（Hatred ceases not by hatred, but by love.）という仏教の一節を引用して、セイロン(現スリランカ民主社会主義共和国)は日本に対する賠償請求を放棄する旨の演説を行った。また、亡くなった折には『右目はスリランカ人に、左目は日本人に』と遺言し、その通り日本人に移植された。これほどの人物が日本で知られていないことは実に残念であり、その長い歴史と豊かな自然とともに日本の人々がもっと訪れて欲しい国の一つだと感じた。今回の研修で得た経験と知識を生かし、参加した生徒たちが将来さまざまな分野で国際的に活躍する一歩になったのではないか。

（引率担当　室井　明）